

サマリア人、マジパネエ！

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24616

サマリア人、マジパネエ！

大学宗教授任 原田浩司

ルカによる福音書 一〇章二五―三七節

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27彼は答えた。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。」28イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32同じように、レビ人もその

場所にやつて来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33ところが、旅を
していたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34近寄って傷に油
とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35そ
して、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この
人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います。」36さて、あなた
はこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。37律法の専門
家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同
じようにしなさい。」

「お客様の中で、どなたかお医者様はいらっしゃいませんか?」。航空機や新幹線、フェリーな
どでの移動中に乗客が体調を崩し、スタツフだけではとても対応ができないような状況の中で専
門の医師の助けを呼ぶ「ドクター・コール」です。学生の皆さんにとってはTVドラマの中で、
たまに見るようなものかもしれませんが。私がかつて大阪に住んでいた時のことですが、東京へ新
幹線で移動していた時に、私は客車の後方の席で本を読みながら座っていたのですが、何やら周

囲がザワザワしている空気に気づき、顔を上げて前方を見ると、車掌や新幹線のスタッフが慌ただしく動いている姿が見えました。他の乗客同士の話が耳に入ってきたのですが、前列に座っている高齢者が口から泡を吹いて意識を失っていたそうです。すると新幹線のアナウンスが聞こえてきて、新幹線は停車予定のない静岡の掛川駅に急ぎよ停車し、体調不良のお客を降ろして病院に搬送するため、乗客の皆様にはご迷惑をおかけしますがご協力をお願いします、といった内容だったと記憶しています。こうして、お客は降ろされて病院に搬送されていきました。この時「ドクター・コール」はありませんでしたが、新幹線のように急ぎよ途中下車できる対応が取れる状況ならいざ知らず、飛行機やフェリーなど、空や海での移動中はそう簡単に途中下車できません。そういう時に、乗り合わせた乗客の中に医者がいなか確認し、いたら乗客を助けて頂きたいという状況は、学生の皆さんも「分かる」と思います。

カナダやアメリカでは、それぞれの州が独自に定めた「州法」の中に、このような移動中に遭遇した突然の事態に、医師や専門家が積極的に手助けして、人命救助を奨励する法律があります。それは「Good Samaritan laws (よいサマリヤ人法)」と呼ばれ、人命救助に加担した際に、専門家ももし人命救助ができなかった場合でも起訴はされず、医師や専門家としての身分が保証されています。この法律の名前「Good Samaritan」は、今日読んだルカによる福音書一〇章二五〇

三七節でイエス・キリストが語られた「よいサマリア人」に由来するのは明らかです。この物語を、もう一度改めて確認します。

ここにエリコという町に向かう旅の途中で、不運にも強盗に遭遇し、半殺しにされて道端に打ち捨てられて横たわる一人のユダヤ人が登場します。するとそこに一人の祭司が通りかかりましたが、彼は一瞥して、横たわる人を避けて通り過ぎていきました。またそこに二人目となるレビ人が通りかかりました。この人も、一瞥すると無視して、通り過ぎて行つてしまいました。今度は三人目にサマリア人が通りかかりました。サマリア人というのはユダヤ人の近隣地域に暮らす民族で、隣接しているからこそ、かねてから衝突やら対立やら、両者の間には緊張状態があり、歴史的に互いに相手のことを快く思っていない関係です。今日の東アジアの国同士の関係と重ね合わせて考えるとイメージが付きやすいかもしれません。そういう状況にあるサマリア人が、怪我を負つて横たわるユダヤ人の脇を通りかかりました。この時、このサマリア人がとつた行動は、民族的な対立関係を棚上げし、今日の前で傷つき、苦しみ、喘いで横たわる一人に目を向け、その人を介抱したのです。そうすることで何か自分に特になること、益になるようなことはありませんが、逆に身銭を切つてでも、このけが人を癒そうとした。この三人目に登場したサマリア人の精神を今日に積極的に活かしていこうというのが、先ほど紹介した「Good Samaritan laws (よ

いサマリア人法」の基本精神だと思っています。

さて、私たちが生活するこの日本ではどうか。少し気になってインターネットで調べてみましたら、ある記事が見つかりました。それは東日本大震災の後の、2011年5月31日（火）付けの茨城新聞に掲載されたものだとあり、「業務外の救命措置で消防指令停職6カ月 石岡市」という見出しで、その内容は「救急救命士の資格を持つ消防司令がプライベートで遭遇した交通事故の際に救急処置を行ったが、「関連法規に抵触する可能性がある」として停職6ヶ月の処分を受けた」というものです。もし皆さんが救急救命士の資格を持っていて、旅先や移動中に丁度目の前で事故の現場に遭遇し、怪我人がいる状況だったら、どうしますか？記事のとおりでしたら、この人は「プライベート」ですから、自分の判断で怪我人に応急処置をしたわけです。いわば「Good Samaritan laws（よいサマリア人法）」が推奨する、ふさわしい行為です。しかし、この人はその事のゆえに「停職6か月」という重たい処分を科せられてしまったというのです。この新聞記事は、読者に問題を提起しています。「これが日本の現実だ」と。「しかし、これは正しいのか、間違っているのか」と。学生の皆さんも考えてみて欲しいと思います。

よいサマリア人の譬え話を語られた後で、イエス・キリストは質問してきた律法の専門家に「行って、あなたも同じようにしなさい。」と言われました。皆さんは、医師でもなければ、救急救命士

の資格を持っているわけでもありませんから、仮に現場に遭遇しても、病人や怪我人に、何かしら積極的に手を差し出すという状況にはならないかもしれません。しかし、「同じようにする」ということの重要なポイントに、怪我を負い、苦しみ、喘いでいる人に、サマリア人が目を向け、関心を注いだ点にあります。最初に通りかかった祭司、そして次に通りかかったレビ人に共通するのは、この怪我人を一瞥した後、無視して、そのまま立ち去ったことです。まったくの「無関心」だったのです。他方、サマリア人はこの怪我人に「大丈夫かな」と関心をもち、大丈夫そうじゃないのが分かると、彼は怪我人を心配し、一所懸命に介抱しました。最初の祭司、レビ人と、サマリア人とを分けるのが「無関心」です。

ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサの言葉でよく知られているものに「愛の反対は、憎しみではなく、無関心である」という言葉があります。愛の反対が無関心であるなら、無関心の反対は何かというと、関心です。関心を寄せる、関心を持つ、関心を注ぐ。実はそれこそ「愛」につながっていることを、マザー・テレサの言葉は私たちに伝えていきます。

互いが互いに無関心になり、昔ながらのコミュニティ（共同体）が消えつつある現代社会の中で、これからの社会を作っていくのは若い皆さんたちです。急病人の人命を救いましょうとか、そういう大きな（マジパネエ）ことを皆さんにして欲しいなど言うつもりは全くありません。そうで

はなく、小さなことでもいい、他者へ、隣人への関心を持つことを忘れて欲しくないという点です。特に、痛み、苦しみ、弱さを覚えている人に対する関心の眼差し。そこに聖書が伝える、イエス・キリストが教える「隣人愛」の精神があります。何も大それた（マジパネエ）ことをしなくていい。小さな関心と労りから愛は広がっていきます。